

平成21年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1272800267		
法人名	医療法人 明星会		
事業所名	グループホーム まきの家		
所在地	千葉県鴨川市広場1665番地		
自己評価作成日	平成21年10月21日	評価結果市町村受理日	平成22年1月6日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://kaigo.chibakenshakyō.com/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人VAICコミュニティケア研究所
所在地	千葉市中央区千葉港4-4千葉県労働者福祉センター5階
訪問調査日	平成21年11月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>認知症が進行しているも、入居者が生活の中で孤立せず、人との関係を持って生活できるようにする。</p>

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>母体法人が営む東条病院に隣接するグループホームである。平成17年の開設以来、地域に根差し、家庭的なサービスを提供し続けている。同法人の病院、メンタルホスピタル、訪問看護ステーション、デイサービスが隣り合い、横の繋がりも深く、医療面でも安心感の強いホームである。平成21年は特に大きな変化もなく、入居者と職員は、和気あいあいと平穏な日々を過ごしている。法人としては5月より地域のグループホーム管理者交流会を主催し、同業他社との繋がりを深めている。また鴨川市で開かれた認知症メモリーウォークに参加し、ホームについての展示なども行った。さまざまな面で、安心感、安定感を与えるホームである。</p>
--

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 該当するものに 印	項目		取り組みの成果 該当するものに 印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

グループホームまきの家 自己評価(花の棟)および評価結果(全体)

自己評価(花の棟)および外部評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事務室、各棟に運営理念を掲示し、常に意識しサービスの提供を行っている。	家庭的な雰囲気を大切にし、日々のサービスを提供している。職員はみな、理念を念頭において日々のケアを行っている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常的な交流は特にないが、地域の行事(小学校の運動会、祭礼の見物など)に参加している。	今年は鴨川市で開催された認知症メモリーウォークに参加した。老人会や小学校との交流も行っている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	相談等があった時等は、出来るだけ応じるようにしているが、それ以外には特にしていない。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度運営推進会議を開催し、ホームの活動状況などを話し合い、委員に意見を求め、今後の活動の向上に活かすようにしている。	地域包括支援センター、老人会、入居者家族などが参加し、意見交換している。ホームの状況報告等に対し、委員から様々な意見が寄せられ、運営に反映している。	
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	日頃から協力関係ができており、何かあれば連携できる。	地域包括支援センターや高齢者介護課と、必要に応じて連絡を取り合っている。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の対象となる行為を職員は理解し、入居者が自由に行動できるようにしているが、時間帯などで、安全面に考慮し玄関の施錠は行っている。	原則として身体拘束は行わない。玄関の鍵を、職員が手薄な時間帯などは施錠することもあるが、家庭用の普通の鍵なので、開けようと思えば開けることは可能である。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入浴時なども含め、全職員が、入居者の身体に関して、情報を共有することにより、注意して見ていくようにする。		

グループホームまきの家 自己評価(花の棟)および評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員の中では勉強会などで話し合ったりしているが、家族などについては、こういう制度もありますよ程度の説明をしている。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、重要事項とともに説明を行い、不安なども尋ねて、十分な理解と納得を得ている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談、意見などを気軽に言っただけのよう、新聞や掲示板に記載している。意見などがあれば、運営会議で話し合い、ホームの運営に反映させるようにしている。	どの入居者家族も比較的多く面会にきており、その際に職員と意見交換している。また運営推進会議等でも意見を聞き、運営に反映するようにしている。外出支援については、家族と更に話すとういと思われる。	ホームでは入居者の外出支援を行っているが、家族の評価が低い為、会議等で意見交換し、外出に対する考え方のすり合わせを行うことが望まれる。
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の会議で、運営に関して各職員の意見を聞き、意見があればその場で話し合っている。	定期的なユニット会議で意見を出し合う機会がある。また所長とは年2回、個別面談の機会がある。仕事面、待遇面など、職員が意見を言える体制が構築されている。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	自己評価シートを活用し、職員個々に「自己目標の設定」をし、管理者はそれに向けての支援を行なうようにしている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修などへの情報を提供し、参加するようにすると共に、日々あったことも含め、申し送りや会議の時に話すこともある。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	平成21年度より、管理者の集いを始め、この中で、職員交流を行なう機会をもうけている。		

グループホームまきの家 自己評価(花の棟)および評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時に、要望などを聞き入れるようにしている。また、入居後も、サービス計画作成時に、要望などの有無を聞き、本人が安心して過ごせるようにする。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時に、要望などを聞き入れるようにしている。また、入居後も、サービス計画作成時に、要望などの有無を聞き、サービスを提供していく旨を伝えることで、本人共々、安心していただけるようにしている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前にホームに見学に来てもらうようにしている。その際、要望なども含め話を聞き、安心して生活できるような支援を話し合う。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自立を促し、できることを自ら行なってもらうことで、生活の中での自分の役割を感じられるように支援している。それが共に生活する関係と考えている。		
19		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	外出に、家族の参加を促し、共に楽しみ時間を共有する。また、面会時普段の状況を伝え共に考えていくことで関係を築いていく。		
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅への外出や、地元付近へのドライブなどを行なう。また、家族が親戚の家や墓参りなどへ連れて行くなどがある。	ホームに入居してからは、この場所で新たに関係を築いていって欲しいと考えている。鴨川市は広いので、入居者個別に馴染みの人・場と関係継続の支援をしていくことは難しい。	かつて住んでいた場所に行ったり、友人知人に会うことは難しいかもしれないが、入居者のこれまでの人生を大切にしたい支援を、引き続き検討していくことが期待される。
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係を大切にしている。ADLや周辺症状などで分けるようなことはしない。共に生活する者同士と考えて支援している。		

グループホームまきの家 自己評価(花の棟)および評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	顔見知り程度の関係は続いているが、特別に支援はしていない。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	サービス計画作成時、本人、家族の意向を聞く。明確な意向が困難な方は、家族の意向を基に、本人本位に考えている。	面会時に家族から要望を聞くようにしている。面会の少ない家族に対しては、電話で様子を伝えるなどして面会できるきっかけを作っている。入居者の思いは話の中から察するよう努めている。	認知症など介護度が進んでいるため、聞き取りにくくなっている入居者には、日々かかわりの中で行動や表情から本人の思いを察することが期待される。
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族から、生活歴や馴染みのものなどを聞き、ホームで、その人らしい生活ができるように努める。また、入居後も、家族の面会時や普段の会話の中で、気づきや把握したことを生活に活かしていく。		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	サービス計画作成時、できること できないこと、暮らし方、わかること わからないこと、心身の情報をアセスメントし把握している。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者の担当職員を決め、各担当者がアセスメントを行い、本人、家族の意向、担当者及び、必要な関係者の意見を踏まえ、計画作成者が介護計画を作成している。	月に1回モニタリングを行っている。必要に応じて専門家の意見を聞き、要請があった時点で改善している。目標は3か月ごとに見直され、介護計画にも反映している。	
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録に記入して情報を共有し、見直しがあれば会議で話し合う。毎日の申し送りの際、気づきがあれば、その都度見直し、職員間で情報を共有するために、申し送りファイルに記入されたことは、各自読んだ後サインをする。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームのサービスをニーズに応じて提供しているが、それ以外は行っていない。		

グループホームまきの家 自己評価(花の棟)および評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域で開催される行事などへの参加を行っている。また、定期的にボランティアの受け入れも行っている。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には、本人及び家族の希望する医療機関に受診している。母体である医療法人明星会 東条病院が隣接しており、緊急時や受診の便利さから、家族の要望で、かかりつけ医を東条病院に移すこともある。	隣接する母体病院で診察を受けていて、訪問診療は急変時のみ行っている。入居者個々のかかりつけ医の受診は家族が行っている。年1回、入居者全員健康診断を受けていて適切な健康管理に努めている。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ホームの看護職とは協働できる関係ができている。また、協力病院の看護職とも相談できる体制がある。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	リロケーションダメージ防止のため、入院期間を出来るだけ短くしてもらうような相談をする。また、入院期間中、外出の形で、治療時間以外はホームで過ごすようにするなど、医療機関と相談する。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族に、ホームのターミナルケアの方針を説明し、看取りを行なう場合は、家族にも協力してもらう旨を了承してもらう。その後ターミナルの時期がきたら、随時、家族と話し合いを行いながらケアを進めていく。	ターミナルケアの方針があり、家族の希望があれば行う方向である。前例はまだなく、実施状況の評価はできないが、取り組もうとする姿勢が感じられた。	
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	誤嚥時の対応として、家族に救急隊員がおり、実技訓練の勉強会を開催した。緊急時の対応はマニュアルを作成し、それに沿って対応できるようにしているが、病院が隣接しているため、緊急と判断した場合、病院に連絡した方が早い場合が多い。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回防災訓練を実施。夜間想定、火災、地震の訓練を行なう。その際、職員は非常用放送、火災報知機の操作の方法を再確認する。非常時は、隣接の東条病院からの応援体制ができている。	消防署立会いのもと、母体病院と共に訓練が行われている。マニュアルや緊急連絡網は整っているが、備蓄品は母体病院にあるため確認できなかった。	敷地が広いので避難場所は確保されているが、更に広域避難場所についても周知しておくことが望ましい。また今後は地域住民と連携した訓練も期待される。

グループホームまきの家 自己評価(花の棟)および評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	特に敬語は意識していないが、生活の場として、相手を尊重するように心がけている。	部屋に入る時はノックをする、トイレに入る時は声をかける、失敗してしまった時は場所を変えるなど、入居者のプライバシーに配慮している。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	特に介助が必要でなければ、自分の意思で行動してもらうようにしている。危険がない限りは、行動の制限はしない。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事、入浴の時間帯は決まっている。そのほかは個々のペースで生活してもらうようにしているが、散歩などの声かけは行い、閉じこもらないように関わっていくようにしている。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	できる方は自分で行なってもらい、必要な所は介助している。美容院や毛染めなど、希望があれば行なっている。困難な方は介助している。		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	できること、意欲があることは一緒に行なってもらっているが、準備、後片付けは職員が中心になって行い、入居者が手伝うという形になっている。	食事は母体病院の献立を参考に季節のものを取り入れるなど工夫している。誕生日は入居者からの希望を取り入れている。職員と入居者は同じテーブルを囲み食事を楽しんでいる。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量を記録し、食べている量を確認している。水分摂取量が少ない方は、水分摂取表に記録し、必要な水分が取れているかを確認する。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後は行っていない。汚れがひどい方は朝、昼食後も必要に応じて行なう。寝る前は全員行なっている。		

グループホームまきの家 自己評価(花の棟)および評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表に記録し、個々のパターンを把握し、トイレ誘導を行っている。	入居者一人ひとりの毎日の様子が排泄チェック表に細かく記入され、それをもとに排泄介助が行われている。紙パンツ、パッドなど時間帯に合わせて使い分けをしている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品、野菜、果物を、毎日食べるようにしている。個々に、昔からの習慣で毎日ヤクルトを飲んでいる方もいる。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴できる時間帯は、安全面、職員配置により、ある程度決めている。通常は午後2時から5時の間。午後から都合が悪い場合や、失禁などがあれば、午前中にも行なう。全員が、1日おき、または週3回は入浴できるようにしている。	入浴時間は決めているが、希望や都合がある場合は、その都度対応している。浴室には呼び出しブザーが設置されていて安心して入浴ができる。入浴拒否がある場合は、誘い方や介助者を代えるなど工夫している。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の睡眠状況や、生活習慣により、個々に昼寝や休息を取れるようにしている。また、日中活動する、昼寝し過ぎないように声をかけるなど、夜間、気持ちよく眠れるように支援している。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の記録ファイルに現在使用している服薬の説明書を綴じ、確認できるようにしている。変更や臨時の場合は、申し送りファイルに添付し、全職員が把握できるようにしている。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や普段の会話の中から、本人の喜びや楽しみを探り、釣りや動物とのふれあい等の外出を行なっている。また、昔得意だった料理を作るなどで楽しみ過ごすようにしている。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望があれば随時行なう。また、本人の気分転換や好みのもを、家族から聞くなどして、外出したり、家族と協力して自宅へ行ったりする。行事で外出があれば、職員だけではなく、家族にも声をかけ、協力して行っている。	敷地内の広い庭にベンチが置いてある。天気の良い日は、庭に出て散歩や日向ぼっこをしたり、池の鯉に餌をやったりすることもある。近隣住民の誘いで花を見に散歩に出かけたりしている。	

グループホームまきの家 自己評価(花の棟)および評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は全て事務所で行なっている。所持している方は1名いるが、買い物は代行している。普段の食材の買い物に入居者が同行することはしているが、支払いや、管理は困難なので行っていない。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自室に電話を引き電話される方はいる。ホームの電話からかけるのは代行するが、あまり機会はない。外部から本人宛にホームに電話がかかってくるので、職員が受け、受話器を渡し会話している。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	刺激になるようなものは置いていない。植物などを置き、落ち着いた空間をつくるなど工夫している。	リビング兼食堂は、広いスペースで明るく清潔感が漂っている。温度や湿度に気を配り、換気は1日2回行うようにしている。ところどころに日めくりカレンダーが掛けられていたり、手作りの飾りつけなどで生活感を感じる。また一人ひとりのアルバムが作られていて、いつでも見られるようになっている。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者は、食堂、居間などで思い思いに過ごしている。廊下の隅に椅子を置くなど、小さな場所でも、居場所を作るようにしている。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室への私物の持込は、危険物以外は制限していない。認知症や車椅子の移動により、安全面から、家族の意向でものをあまり置かない方もいる。	各居室には洗面台と広い収納スペースがあり、入居者はそれぞれ使いやすいように活用している。家具や思い出の品などの持ち込みは自由で、落ち着いた空間となっている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	刃物や洗剤など、危険物の管理以外は、生活の場として必要な物は置いておくようにしている。		